

新刊
紹介

Books are the quietest and most
constant of friends; they are the most
accessible and wisest of counsellors,
and the most patient of teachers.

辻本敬三(校友) 歌集「雑草園」 東京・

胡桃館、B6判二八三頁、定価六〇〇円。

著者(大正十三年大経卒)は福助足袋によつて人も知る大実業家。同時に歌人、洋画家、カメラ・マン等豊から才分に恵まれた人である。その歌歴は古く、この歌集は第四歌集。昭和三十一年から三十九年までの作品六百七首が集録されている。私は短歌を語る資格がないが、長年氏の人となりにふれて来たことが、この歌集の上梓を祝すとともに、私を黙っておらせなくした。一口に言い得ることは、氏の作品は、従

来の歌集も同様、わだかまりがなく、いかにも著者の円満な人間がそのまま出ているということである。敢て思索に凝らず、詞にとらわれず、歌人ぶらず、人間として自由闊達、庶民風にして気品と格調を失わない、親しさと端正さがある。

歌は白秋の流れを汲む――。

雲の流れ新涼の色を空に刷く朝渚来て茫と立つとき

語法とイメジにそれを見る。そして外来語の導入に積極的――

日照雨来てフロントグラスを濡らすとき

ワイパー始動す時刻むごと

また日本や諸外国の旅の歌が多い。たとえば商用であつても、多忙人には旅情もそれだけ深いのであらう――

ハイビスカスの花の生垣朝の間は目にまぎれなくすがしかりしに(ハワイ)

殊に飛行機の中には最高のやすらぎがある。だから空の歌が夥しい――

星近く光る夜天を航く機音この音響の耳に身に沁む

氏は二科の画家でもあるから視覚的である――

桐の花むらさき淡く土塀ぎわまで麦のぎ立ちてまひるのひかり

叙景が多い――

大杉の五百重群立つ奥の院の下道暗し昼も濡れつつ

抒情も高調である――

父母の墓石に雪の解残りて冬晴れの空に鶯一つ舞う

心境を歌うものの中に次のようなものがある

路の藁の萌ゆる堤のひる日ざし春の日来向う光と思う

つねに平凡の中に新鮮なおどろきを見る

山の上に時をしずくすぐしおり天城万二郎岳に夏雲が立つ

会社最高の責任者にありながら、時に随い処に応じて歌が湧き出る。それも決して小才やおなぐさみでない。人生、社会、文明を見つめ、きびしい試練と体験が歌想を深化し、出来上つた人間がそのまま口をついて出ると歌となっている。そしてその歌境がまたおそらく著者の心を更に清め、深め、高めて行くのであらう。このような歌

人に敬意を表し、このような実業家に賞讃を捧げる。

(見玉)

大島正(商学部教授)著「ドン・ホアンの原型の研究」東京・白水社、B6判二一七頁、定価八〇〇円。

ドン・ホアンという言葉はすでに普通名詞として、日常語の中にふんだんに用いられるほど知れわたっている。しかし著者も言うとおり、「ドン・ホアンの原型がどのようなものであり、各国文学において、ドン・ホアンがどのように変貌していったか」という問題はあまり研究されていないし、知られてもいないのである。著者は、ドン・ホアンの原典であるティルソ・デ・モリーナの「セビーリアの色事師と石の客人」に対して、本邦ではおそらく最初の本格的な分析を行ない、その上、原典たるこの作品の成立についての綿密な調査をしている。すなわち原典のよってきたる原型を、スペインをはじめヨーロッパ諸国の伝説や文献の中に求めるといふ、きわめて至難な作業にいとみ、諸外国の同種の研究を渉猟した上で、的確で独自の見解を披瀝してい

る。すなわち第一章「聖職者ガブリエル・テリエス」では、作者ティルソ・デ・モリーナについての研究をし、第二章では、その作品「セビーリアの色事師と石の客人」の全訳を示し、第三章「原型としてのドン・ホアン」ではモリーナのドン・ホアン像の性格を分析し、第四章「ドン・ホアンの源泉」において、前述の成立過程を説明している。第二章での作品全訳はすぐれた訳業である。この名作については、筑摩書房の世界文学全集にも他の訳があるが、比較してみると、こんどの翻訳の方がわれわれにもよくわかるし、訳出に非常な苦勞がはらわれていることが読みとれる。第三章はもっとも著者の力が入った部分であろう。これを讀むと、原型としてのドン・ホアンが一般に考えられているドン・ホアンのイメージとは非常に異なっていることが知らされる。著者はドン・ホアンを四通りの見方から性格づけているが、これは日本人に初めて知らされたドン・ホアンの本当の姿である。ドン・ホアンは、時の推移によって、かなりの変貌をさせられているものらしい。ことに宗教というものを抜きにして考

えがちなわれわれ日本人には知られなかったドン・ホアンが、ここに浮彫りにされている。第四章は、比較文学者でもある著者が、古い時代の遠い国の伝説や文献を通しての細密な仕事である。石像侮辱の話はギリシャ時代からあるとして詳しく示した後中世ヨーロッパの、できる限りのソースをあさっている。明治以来スペイン語は比較的よく研究され、高橋正武氏の西和辞典などすぐれたものとして定評があるが、他の外国文学に比して、研究者も少く、その文学の特質からも、従来文学の分野においてはあまり本格的な研究書は表わされていない。この中であって、本書は劃期的な著作と称してよいのではなからうか。ドン・ホアンの後裔は、バイロン、モリエール、プーシキンなど世界各国に活躍している。著者が「あとがき」にのべているように、これら後世におけるドン・ホアンの変貌をもあとづけることができれば、世界文学における代表的人物典型の全貌が集大成されることになる。なお本書は日本図書館協会選定図書に選ばれている。(店村新次)

A・シムプソン著、大下尚一・秋山健(文
学部助教授 共訳「英米におけるピューリ
タンの伝統」 東京・未来社、B 6 判二〇八
頁、定価四八〇円。

ピューリタニズムという言葉で示される
イギリスとアメリカ両国の深い歴史的体験
を分析し、評価しようとする本書の試みが
オックスフォード大学で学位を得、アメリ
カの大学で教鞭を執る歴史学者である著者
によってなされたということは興味深いこ
とに違いない。しかしピューリタンたちが
信仰上での、または政治的なさまざまな矛
盾と対決し「あえぐような、あこがれに似
た熱烈な」希望を持って問題を解決しよう
とした時、その努力がもたらした結果が新
しい矛盾への芽となり、やがて挫折への道
をたどる原因となったプロセスを読む時、
読者の興味は一層深いものとなる。それは
本書の原題が示す十六、七世紀のオール
ド・イングランドとニュー・イングランド
という時代や場所が、きわめて現代的な意
味を持って読者に迫って来るからである。
著者はピューリタンを定義して「回心の
体験によって一般の人びとから分かれた、

神が自分たちを用いて人間の歴史に一大変
革をもたらしたという意識によって情熱
を燃やし、神の意志を実行せんとした『選
ばれた人びと』であった』という。従ってし
ばしばアルミニウス主義的傾向を指摘され
るミルトンも神秘主義的信仰を持つクエー
カーたちもここではピューリタンの中に加
えられている。そしてピューリタンたちが
積極的に歴史に参与しながら、歴史によっ
てつくられて行くさまが、分析され説明さ
れて行く。本書のいま一つのテーマは「ピ
ューリタニズムの全歴史はその説教によっ
て呼び起された渴望をみたし得なかった失
敗」について語ることである。そして著者
はこの挫折はピューリタン自身が内包して
いた要素であったと説明する。本書が明ら
かにしようとしたのは、政治、経済の制度
上の問題や、キリスト教の教義的解明では
ない。読者がここに見出すものは、烈しい
霊的な力を得て新しい歴史を作ろうとして
挫折して行った人たちの姿である。

英米の歴史と文学をそれぞれ専攻する二
人の訳者によって訳出された本書は、「訳
者あとがき」に見られるすぐれた解説と、

ていねいな訳註によって、広く一般の読者
をも対象とし得るだろう。(谷本)

岡本清一(校友)著「ナシヨナリズムの論
理」 京都・ミネルヴァ書房、B 6 判二四
二ページ、定価五六〇円。

本書を通していえることは、著者の眼は
ナシヨナリズムの歴史的終焉に据えられて
いるということである。ナシヨナリズムの問
題を正面きって分析したのは、冒頭の「近
代ナシヨナリズムの論理構造」の論文であ
る。著者は、近代国家の成立にナシヨナリ
ズムが不可欠であることを認めつつ、ナシ
ヨナリズムと対立する思想として考えられ
ているリベラリズムもコミユニズムも、と
もにナシヨナリズムの思想に「成る」こと
が出来るし、すでにナシヨナリズムとして
「在る」ということ、またリベラリズムや
コミユニズムは、どのような思想の論理に
よって、ナシヨナリズムの思想と「成る」
ことができたか、という点に視点を置いて
ナシヨナリズムの論理構造を追及してい
る。

そして「成る」ことによって「在る」と

いう方法を用いて、ナシヨナリズムが歴史の段階を異にすれば変質することを解明している。昨年あたりナシヨナリズム論義が論壇を賑わせたが、いずれも現象的な分析にすぎず平板の感を免れずにいるなかで、ナシヨナリズムの論理構造をこの方法をもつて分析したことは成功しているといえよう。

「戦争の思想としての権力の思想」の論文においても、この方法を採用し、すべての政治的な思想は、権力者の思想となることによつて「戦争の思想」に「成る」のだという転化の論理を明らかにしたのである。

さらに、「日本のナシヨナリズムについて」の論文において、日本のナシヨナリズムの原始社会性を強く指摘していることは最近の々日本主義への回帰を訴える論調に警戒の目を向けるべきことを教えてくれる。

「西欧統合と社会主義の将来」の論文は、ナシヨナリズムの時代は終わったという視点に立って、思想としての社会主義は、どう発展するかを論及する。そして社会主義の問題は、当然、従来の色彩を一新させられ

産業民主主義の問題がクローズ・アップされる」と説いているが、論争を呼ぶ労作である。

その他、附録として、戦時中に書かれた三篇の論文が収められているが、著者がナシヨナリズムの問題を考え始めた時期は、それほど新しいものではないことを知ることができ、著者の思想形成を理解するうえにも参考となるだろう。（太田）

内田智雄（法学部教授）日原利国校訂「定本・明律国字解」東京・創文社、五〇〇〇円。

このたび狹生徂徠の「明律国字解」（みんりつこくじかい）が内田、日原両氏の骨折りで、徂徠生誕三百年の記念すべき年に全くよそおいを新たに出版されたことは学界の慶事である。明律というのは中国の明代の刑法典でそれを国字つまり日本語で訳解したのがこの書物である。徂徠のころ、いかえれば八代將軍吉宗の時代は、この明律をも含めて中国法制の研究がちょっとブームであった。明律に先行する重要な刑法典である「唐律疏議」（とうり

つそぎ）が徂徠の弟の北溪によつて綿密に校訂され、それが中国本土に渡り、時の司法大臣勅延儀（れいていぎ）の序文を得て回送されて来ていることなどは、その顕著な事例であろう。

明律に関しては徂徠のほかにも数種の国字解があったが、徂徠のものが最も普及し版も幾種類がある。このたびの新版は徂徠の自筆本を底本にして、それらの版本とも校合し、対照に便利のように明律の原文を添え、さらに語句索引を付録した「明律国字解」の決定版とも称すべきものである。

（朝日新聞 昭和41年10月21日付）

（京大教授・森 鹿三）

